

＜第136回国際ARCセミナー(石井真美子氏)レビュー＞

祇園祭と中国古典文学

戸塚 史織(立命館大学大学院文学研究科/日本学術振興会特別研究員<DC>)

E-mail lt0875sf@ed.ritsumei.ac.jp

1. はじめに

本稿は、2024 年 7 月 3 日に開催された「第 136 回国際 ARC セミナー」における石井真美子氏¹⁾の講演²⁾内容を報告するものである。石井氏は、祇園祭に焦点を当て、山鉦に見える中国古典文学の具体例とその意義について詳細に論じられた。

2. 発表内容

2-1. 祇園祭と中国文化

祇園祭は、貞観 5(863)年の疫病鎮めの御霊会に起源を持ち、貞観 11(869)年には六十六本の矛を神泉苑に立て、祇園社から神輿を送る行事が執行されたことが『祇園社本縁録』に記録されている。これが祇園御霊会の始まりとされ、さらに天皇即位時の大嘗祭で用いられる「標山」という山型の装飾物が祭礼に取り入れられ、これが祇園祭の山鉦の原型となった。

祇園祭の山鉦には、中国古典文学をモチーフとするものがあり、例えば菊水鉦では中国の仙人・彭祖を模した天王人形が用いられている。また他の地方でも、例えば愛知県の犬山祭では、西王母や四神を象った装飾が施された山車が見られ、日本各地の祭礼にも中国文化の影響が存在する。中国文学が日本の祭礼の中に取り入れられた背景には、中国文学の早期伝来とその広範な受容が関係しており、『日本国見在書目録』³⁾などの史料から、当時の知識層や庶民に中国古典が広く浸透していたことがうかがえる。特に祇園祭は庶民主体の祭礼であり、山鉦の装飾には彼らの文化的嗜好や願望が反映されていると考えられる。

2-2. 函谷鉦について

函谷鉦は、応仁の乱以前から存在し、消失と再興を経て現在に至る歴史ある鉦である。この鉦は、中国戦国時代の鶏鳴狗盗の故事をモチーフとしている。この故事は『史記』に記され、孟嘗君が食客達の機転により危機を脱したエピソードとして知られる。秦の昭王に捕らえられた孟嘗君は、釈放の条件として寵姫に白い狐の毛皮を求められ、食客が犬の真似で倉庫から盗み出し、釈放が実現した。その後、孟嘗君は秦から脱



図1 『山鉦由来記(祇園会細記)』国文学研究資料館蔵

出した。夜半に函谷関に到着したが、門が鶏鳴まで開かない掟があった。そこで鶏の鳴き真似が得意な食客がその声を真似て門を開かせ、脱出に成功した。

鶏鳴による脱出劇は日本でも広く知られ、『後拾遺和歌集』の清少納言の和歌「夜をこめて鳥の空音は謀るともよに逢坂の関は許さじ」では、函谷関の鶏鳴が比喻として用いられている。

函谷鉦では、孟嘗君を天王人形として配置し、懸装品や天王台に鶏を多く用いる点が特徴的である。鶏がモチーフとして強調される背景には、中国及び日本における鶏の文化的象徴性が関係している。中国では、鶏は陽の象徴であり、破邪や厄除けの力を持つとされた⁴⁾。日本でも、鶏は光をもたらす神聖な動物として神話や古代信仰に登場し、その形を模した埴輪も発見されている。このように、鶏は困難を克服し、邪悪を払う象徴として日本の祭礼文化に適合していた。この背景から鶏鳴狗盗の物語は単なる英雄譚ではなく、困難を機転で克服し、邪悪を払う象徴的な意味を持つものとして函谷鉦に採用されたと考えられる。

なお、函谷鉦以外に鶏をテーマにした「鶏鉦」もある。『山鉦由来記』では、鶏鉦は諫鼓の伝説に基づくとされる。古代中国の春秋時代、中国古代の聖天子が人民の諫言を受け入れるために設置した諫鼓が、善政の結果用いられることがなく、苦むして鳥も驚かない状態になったという逸話である。ただし、享保 2(1717)年の

『諸国年中行事』には、鶏銚と別に諫鼓銚が記載されており、二種類の銚が存在していた可能性も示唆される⁵⁾。その場合、鶏銚は諫鼓銚とは別に、例えば天照大神の岩戸隠れで光を取り戻すために鳴いた鶏を象徴し、破邪や再生の意味を持つとも考えられる。

2-3. 孟宗山について

孟宗山は「筍山」とも呼ばれた山である。応仁の乱以前から存在し、天明の大火で消失したものの、文化2(1805)年には再興された記録が残る。中国三国時代、呉の孟宗の逸話に由来しており、母のために冬に筍を掘り出したという伝説で知られる。二十四孝の一つとして後世に伝えられ、日本では室町時代に御伽草子の題材となり、道德教育の教材として普及した。

孟宗の逸話は、複数の文献で異なる形で語られている。例えば、日本でも広く読まれた教訓書『蒙求』には、孟宗は常に母への孝行を忘れず、任地で得た季節の食物をまず母に送ったという。孟宗の母は筍が好物だったが、冬のために生憎筍はまだ生えておらず、孟宗は竹藪で嘆き悲しんだ。すると筍が生えてきて、彼は無事母親に食べさせることができたと伝えられる。一方『新刊全相二十四孝詩選』では、病気の母が冬に筍を求めた際、それを叶えることで病が治ったと語られる。さらに『啓蒙類聚』には、母の墓前に筍を供えるため孟宗が竹藪を探したという物語が収録されている。

これらの逸話に共通するのは母への孝行という普遍的なテーマである。庶民にも行動教育の資料として広まった本物語は、その広範な流布と母への孝行というテーマ性から祇園祭の山銚に採用されたと考えられる。

2-4. 郭巨山について

郭巨山は、江戸時代には「釜掘り山」とも呼ばれた山で、明治以降に現在の名称になった。この山は、後漢時代の郭巨の逸話に由来し、老母を養うために子を犠牲にしようとした際、地中から黄金を得たという伝説が元になっている。この物語は『蒙求』『今昔物語』、そして二十四孝を通じて日本でも広く知られた。

郭巨の物語は、文献ごとに異なる形で語られている。『蒙求』では、貧困故、郭巨が母を養うべく子を埋めようと穴を掘った際、地中から黄金を得たとされる。金には「天が郭巨に賜ったもので、奪ってはならない」との記述があった。細部は異なるものの、ほぼ同じ内容が二十四孝や『御伽草子』にも見られる。一方、北宋の『太平御覧』では、郭巨は大富豪の家に生まれたが、財産は弟たちに与え、自らは母を扶養したとされる。この話では、子を埋めようとしたところ黄金一釜を掘り出し、その後役所の裁定により正式に所有権を得たとされる。

ただし、この物語には批判的な見解もある。明代の株宏は『直道録』で、「子供の食料はわずかであるのに、埋めるのは非道である」と非難し、孝行のために他者を犠牲にすることの倫理性を問うた。一方、『重修漢孝子

郭公祠記』では、郭巨の行為そのものには批判があるものの「孝行が奇跡を起こした」という点に注目し、その伝承が教訓的役割を果たした点を評価している。また日本では、室町時代の戦乱の中で、親への孝行を強調する物語が教育的に重要視され、広く普及した可能性が高い。この物語が郭巨山のモチーフに採用されたのは、「孝行すれば良い報いがある」という教訓的な意味が祭礼の精神と合致したためと考えられる。

なお、日本で作られた『二十四孝』図では、郭巨が地中から得たのは黄金の「釜」として描かれることが多い。これは、本来は黄金「一釜」であったが、「釜」という単位が庶民からみて分かりづらく、誤解を生み、その結果器物の釜の形で伝播したと推測されている⁶⁾。

2-5. 蟪蛄山について

蟪蛄山は、蟪蛄のからくりが特徴的な山である。『祇園祭細見』⁷⁾によれば、「蟪蛄の斧を以て隆車の隧を禦がんと欲す」という中国の故事に基づくとされる。斉の荘公が狩りの際、蟪蛄が車輪に立ち向かう姿を目にし、「退くことを知らず敵に挑む勇敢な性質」を称賛した。荘公は「もしこれが人なら天下の勇士だ」と感嘆し、車を迂回させて蟪蛄を避けたと伝えられている。

また蟪蛄山としては、南北朝時代の四條隆資の戦いぶりから「蟪蛄の斧」を連想し、永和2(1376)年四條家の御所車に蟪蛄を飾り巡行したのが始まりとされる⁸⁾。

2-6. 伯牙山について

伯牙山は応仁の乱以前の記録がなく、名称も複数の表記が存在していたが、明治初期に現在の名称が定着した。この山の題材は、中国の琴の名手伯牙と、その友人鍾子期の逸話に基づいている。鍾子期は琴の音色から伯牙の心情を正確に読み取った。伯牙が琴で高山の壮大さを表現すると、鍾子期は「まるでそびえ立つ山々に登ったようだ」と称賛し、大河の流れを演奏すれば「長江や黄河の広大さを感じる」と感嘆した。鍾子期の死後、伯牙は「琴を聴くに値する友を失った」と琴を壊し、二度と演奏しなかったと伝わる。

一方で、この山のモチーフにはもう一人モデルがいると考えられる。それは戴逵で、琴の名手だった彼は王の召しを断るため自ら琴を壊したと伝わる。戴逵は王に仕えることを断ったため、伯牙の話の方が相応しいとされたのか、明確ではないが、現在では伯牙の逸話が山の名前に冠され、その精神を象徴している。

2-7. 白樂天山について

白樂天山は、応仁の乱後の明応6(1497)年頃に建てられたとされる。『山銚由来記』では「樂天山」と表記されるが、他文献では「白樂天山」と記され、この名称が正確と考えられている。白樂天は、日本でも人気の高い詩人白居易のことで、その詩文集『白氏文集』は早くから日本に伝来し、菅原道真や源氏物語、舞楽に

も多大な影響を及ぼしたことで知られている。

山の題材となった白居易と禅僧の問答は中国でも様々な文献に見え、日本では鎌倉時代の仏教説話集『沙石集』などに収録される。白居易は、木の上で座禅をする禅僧を訪ね、危険ではないかと問うた。禅師は「煩惱の火が燃え上がるあなたの方が危険」と返答した。白居易が佛教の真髓を問うと、禅師は「諸悪莫作 衆善奉行 自浄其意 是諸佛教」と答えた。白居易がそれは三才の子供でも知っていることだと言うと、禅師は「三才の童子これを知れども、八十才の老人実践しがたし」と諭した。白居易はこの言葉に深く感じ入り、自らの未熟さを悟ったという。この逸話は「知る」と「行う」の間の大きな隔たり、実践の難しさを象徴しており、この普遍的テーマ故に白樂天山に採用されたと考えられる。

なお、白樂天山の装飾は中国風の衣装が使用されていたが、文政4(1821)年に現在の狩衣に改められた。

2-8. 鯉山について

鯉山は、応仁の乱以前から存在し、日本の鯉のぼりのモチーフにもなっている登竜門の故事を題材とする。登竜門の逸話は、中国の『後漢書』『李膺伝』の注や『太平広記』に引かれる『三秦記』に見える。前者では竜門と呼ばれる激流は魚や亀が遡上するのが困難であり、登り切った魚は竜に変わるとされ、数千匹の魚が挑むものの、成功するのはわずかであったとされる。後者ではより具体的に記述され、黄色い鯉が竜門を上りきると竜になると明記され、成功する鯉は一年に多くて七十二尾とされる。登竜門を初めて上りきった鯉は雲や雨を呼び起こし、後に天下を治める王の誕生を象徴するとされた。この背景から、登竜門に登り切った鯉が出世や成功を象徴し、後に王の誕生を意味するものと解釈され、山のモチーフに採用されたことが分かる。

2-9. 結び

これらの山鉾に見る中国古典文学の影響は、古代の中国文化が日本に深く浸透し、日本独自の解釈を通じて新たに日本の文化となって継承されてきたことを物語っている。また、中国古典の逸話から必要な要素を選び取り、日本文化に適合させた受容の過程がうかがえる点は貴重である。特に祇園祭では、こうした中国文学に由来する物語を元に、日本の文化として伝統を守り続けてきた点に、特徴と意義が見出せる。

3. おわりに

本講演では、祇園祭の山鉾に取り入れられた中国古典文学の影響とその意義、再構成の過程が多角的に考察された。質疑応答では、山鉾が地方の山車文化に与えた影響、絵画的伝播の役割、物的流通の実例といった多岐にわたる視点から議論が展開された。

例えば、二十四孝のモチーフが地方祭の山車にも取り入れられている状況について、祇園祭を通じて伝

播した要素と地方独自の受容の両面が示唆された。また、郭巨山の「釜」に見られるように、本来単位であった「釜」が器物として解釈され、絵画的なインパクトと共に流布した事例から、庶民に受容され易い絵画的資料も含めた検討の可能性が指摘された。さらに、白樂天山の前懸に使用された清朝の官僚服のように、中国から輸入され山鉾の懸装品となった物品そのものが山鉾に影響を与えた可能性が議論された。

これらの議論を通じ、祇園祭の山鉾が単に中国文化を模倣したものではなく、日本独自の解釈や再構成を通じて、中国文学や文化を受容し、継承・発展させた象徴であることが改めて確認された。また、町衆が高い文化的水準と創意工夫をもって山鉾を形成したことが再認識された。一方、現代では山鉾の元となった逸話やその伝来が忘れられている部分があり、その意味を知りたいと願う山鉾町の町衆の姿も共有された。

祇園祭は、日本における中国文化の受容を象徴すると同時に、外来文化をいかに日本自らのものとして発展させてきたかを示す格好の事例である。本講演は、祇園祭を通じて見える文化的営みを見つめ直し、今後の研究や交流の新たな展望を開く内容であった。

[注]

- 1) 立命館大学文学部中国文学・思想専攻教授
- 2) 立命館大学アート・リサーチセンター「第136回国際ARCセミナー(Web配信)」
<https://www.arc.ritsume.ac.jp/j/news/pc/020830.html>
- 3) 『後室博物館御蔵 日本国見在書目録』古典保存会影印、1915年
- 4) 『後室博物館御蔵 日本国見在書目録』古典保存会影印、1915年
- 5) この点については、後年宝暦7(1757)年『山鉾由来記(祇園会細記)』の記述との違いから、『諸国年中行事』の勘違いの可能性もある。
- 6) 実際に器物の釜が出土する様子が描かれている書籍として熊沢蕃山評注、浦川公左画『二十四孝絵抄』心斎橋通安堂寺町(大阪)、天保13(1842)年 早稲田大学図書館蔵(九曜文庫)
https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/bunko30/bunko30_e0172/index.html、『二十四孝(下)』川瀬石町(江戸)・山口屋権兵衛、元禄4(1691)年 早稲田大学図書館蔵(雲英文庫)
https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/bunko31/bunko31_e1637/index.htmlが紹介された。
- 7) 松田元『祇園祭細見』京をかたる会、1977年
- 8) 蟬螂山公式ホームページ
<https://tourouyama.jp/>